

美の具象性 (完結)

深 田 康 算

五

此所で吾々の意味する所の美學上の所謂具象觀念説とは、斷はる迄もなく、單に美の具象性を主張する學説を指すのではない。寧ろ美の具象性を主張する人々の中の或者に依りて、文學に於ける具象性の問題に附隨する如くに見られたる困難を切抜ける爲めに、試みられた一方の血路であり、迷ひ込まれた一條の横路である。具象觀念 *anschauliche Vorstellung* の助を借りて美の具象性 *Anschaulichkeit* を文學にも認めよう。と試みる此種の學説の特徴は、それであるからして、具象性を美に認めると云ふ點に在るのではなくして、美の具象性が文學に於ては具象觀念に基くと見る點に存する。その特徴を尙一層明瞭ならしめる爲めに、而して美的具象性説から此の如き具象觀念説を截然區別する爲めに、吾々は之れを『內的直觀』*innere Anschauung* 説若しくは

『言語傳達器』Sprache-Vehikel』と稱ふことが出來やう。何故ならば、具象觀念説は、美の具象性が言語に依る文學に於ては、其感覺的形式に基けられ得ぬことの理解に立脚して、それを言語を通じて傳達せらるゝ内容の上に基けようとする。そして、文學の形式が否定せられると共に、其感覺的なることに於て否定せられたその具象性が、言語に依りて傳達せらるゝ内容である所の觀念の具象的なることに於て肯定せられて居るのである。具象觀念の助を借りて美の具象性を文學に認めるのは、それであるからして、一方に於ては、具象觀念たる内容を傳達する所の言語が單に内容を傳達する役目のみを有すること即ち言語が傳達器に過ぎぬことを認めるのでなければならぬ。而して、其れと同時に、他方に於ては、斯くして言語に依り傳達せらるゝ具象觀念が、音や色や形やに依つて與へらるゝ觀念と同じき程度に於て、又同じき種類に於て、具象的であるとせらるゝ以上、それは、夫等に對して唯『內的』なる點に於て異なるに止まる所の直觀でなければならぬ。傳達器なる言語、換言すれば符號に過ぎざる言語に依つて喚び起さるゝ觀念が具象的であると云はれ得る場合は、それが『內的感覺』der inneren Sinnに對して、恰も感覺像が外的感覺に對してさうである様に、直觀の像である時にのみ限られるのである。此の如き具象觀念説、若しくは言語傳達器

説若しくは内的直観説の最も好き代表者を吾々はフリードリッヒ・フィッシャーに於て見る。具象理想論者なるハルトマン及び現代の折衷家なるゾルケルトも亦此類に屬するものと云へやう。

ヘーゲル所謂『現理的の感念覺』のはれを承け繼いだフィッシャーは、美に於ける感覺的要素の役目を認め、之れを高調し力説することに於て敢えてペーターに譲らない。彼に従ふも總ての藝術は又感覺的材料を通じて吾々に訴へるのである。『美なるものとは、理念の純粹表現として現はれたる感覺的個々物である。さうであるからして、其所には理念にして苟くも感覺的に現はれざる如き何物もなく、又感覺的なるものにして理念の純粹表現たらざる如き何物もなす』Das Schöne ist ein sinnlich Einzelnes, das als reiner Ausdruck der Idee erscheint, sodass in dieser nichts ist, was nicht sinnlich ersiehene und nichts sinnlichersich eint, was nicht reiner Ausdruck der Idee wäre. (F. Vischer, Aesthetik, S. 14.) 其故に彼の見地に從へば、詩人も亦他の藝術家と同じく、内容想 || 理念を感覺的具象的形式に於て表現しなければならぬ。文學的作品も理念の純粹表現たる、感覺的個々物でなければならぬのである。併しフィッシャーは文學の感覺的材料が他の藝術の、其等とは本質的に異なりたるものであると考へ、言語の文學に於ける役目が、音の音樂

に於ける及び色と形との繪畫彫刻に於ける役目と全然同じからざるものであると見て、文學に於ては言語は單に『傳達器』たるに過ぎぬと斷言して居る。Do. § 836. そして、其故に文學に於ては嚴密な意味に於ての『感覺的個々物』はあり得ず唯之れに相當する所のものが『內的直觀』に『內的感覺』に與へられる想像的個々物——換言すれば具象觀念——に於て見出される。他の藝術に於て感覺が持つて居る役目を、文學に於ては內的感覺と考へられたる想像が引受けて居る。それに依つて文學は始めて藝術たり得るのであり、而して加之それに依つて文學は總ての藝術の全領域をさへ自己の中に取り入れることが出来るのである。Do. § 838—839. 更らに尙一步を進めて云ふならば、此立場からして、其故に文學は最も緊密なる形式と内容との融合を成遂げ得るものとして、總ての藝術の典型であり又標準であるとも考へることが出来る。——ハルトマンも亦全く之れと同様なる立場に立つて居る。繪畫や彫刻が感覺的假象の藝術 *Künste des Wahrnehmungsscheins* であり、文學が想像的假象の藝術 *Kunst des Phantasischeins* であると彼の云つて居るのは此意である。Hartmann, *Ästhetik* II. S. 718. 茲としてハルトマンはそれを『必然的なる缺く可らざる傳達器』*notwendiges un-entbehrliches Vehikel* 云つて居るが、やはり言語を『傳達器』に過ぎぬと見て居る點は、

シヤトと同じである。——フォルケルトも亦略同様の見地から『想像の藝術』たる文學

に於て、其叙述に具象觀念の伴ふこと、及び伴はねばならぬこと、之れが伴ふ場合に於てのみ藝術的たり得べきことを詳論して居る。Volkelt, Aesthetik III. 53—63. I. 412—427.

是等の學者の説に従へば、(一)言語は『傳達器』たる役目を有するに過ぎぬこと、(二)具象觀念が言語の媒介に依りて吾々の内的直觀若しくは想像力の上に惹き起さること、此二つの條件を充たすことに於て文學は藝術たり得る。斯くして、文學の他の藝術と異なる特徴が一方に於て見定められると共に、美の具象性と云ふ特色が文學にも認められると云ふ便宜を此學説は持つて居るやうに見える。然しながら、言語は果して傳達器たるに過ぎぬであらうか、言語に依れる描寫は果して所謂具象觀念を——感覺像と單に内的たる點に於てのみ區別せらるゝに止まる想像的心像を——惹き起し得るであらうか。是等の疑問は吾々をして言語に關しての尙一層深い考察に吾々の注意を向けしめなければ止まぬと共に、文學に於ける形式の問題に就ての一つの新たな見解を豫想せしめなければ止まぬ。フリードラーが『藝術的活動の根源』K. Friedler, Über den Ursprung der Künstlerischen Tätigkeitは前者に關して、テオドア・マイヤーが『詩の原理』Theodor A. Meyer, Stilgesetz der Poesieは後者に關して、多

くの示唆と問題とを吾々に提供して居る。

併し具象觀念説を批評するに當つて、最も手近かなる方法は、所謂具象觀念が果して言語に依りて吾々に傳達せられ得るか、若しくは言語的描寫が果して所謂内的心像を吾々の想像の眼の前に喚び起し得るかを検査することであらう。フイッシャーは『詩は有聲の畫である』と云ふシモニデスの語を正しいと云ひ、音樂に於ては閉ざれたる視ゆる世界が詩に於て再び開かれると云ひ、詩人の役目は實は造形美術家の遣り方を摸倣することであると云ひ、眞正の詩は吾々をして其中に描かれた人物を手で攫かむことの出来る程明らかに吾々の目の前に置く、ホーマーの英雄は彫刻的明確さを有し、シエクスピアの人物は繪畫的光彩の中に照らし出され、吾々は其容貌の孰れの一筋をさへ見ると云つて居る。Do. § 838, S. 1172. 抒情詩に於ては多少制限があり、又『内的に見る』ことをあまりに詞通りに解してはならぬと彼は斷はつて居るが、併し彼の立場は疑ふ餘地もなく具象觀念説である。若し假りにペーターの文學觀が文學をして其範型を音樂に求めしめるものと云へるならば、フイッシャー等の文學觀は文學を以て繪畫に似通へる印象を與へることを、換言すればホラチウスの所謂 *uti pictura poesis* と企圖せしめるものとも云へる。文學の具象性は、果して彼

等の考へてゐる如くに、具象觀念の言語に依れる喚起に基けることが出来るであらうか。

此問を事實に訴へて決定する爲めには、一方に於ては文章を構成する各語の夫々に就て、それが所謂具象觀念を喚び起すかを検査すると共に、一方に於ては一つの文章の理解に具象觀念の媒介が必要であるか否かを検査するのが正當である。而して單語に就ての極めて簡單なる反省も、已に吾々に所謂具象觀念の不可能なるべきことを教へる。具象的名詞や具象的動作を指示する動詞でさへも、之れを聽き又は讀む所の吾々の心に決して所謂具象觀念を想ひ浮べしめない。少くとも、此の如き一語に對して吾々が多少具象的に想ひ浮べるであらう所のそれに相當する觀念は、その具象的なる程度に於ては、其語と必然的に結合しなければならぬと云ふ關係を全く有して居らぬと云へる。例へば『馬』と云ひ『走る』と云ふのは具象的なる物と具象的なる動作とを指示する。併し是等の語に對して吾々が想ひ浮べ得る具象的觀念は、云はゞ吾々が勝手に各自の經驗から手近かなる心像を擲ひ來つて之れに附け加へるのに止まり、其等の無數に可能なる具象的心像の孰れか一が此語と必然的に結び附けられなければならぬ理由は何處にも存しないのである。此意

味に於ては、吾々の精神生活に於て言語の有する特殊の役目は恰もそれが飽くまでも抽象的であると云ふ點に存する。具象性を言語に要求することは言語の本質に就ての根本的謬見に囚はれて居るものと云はなければならぬ。普通に考へられて居る所に依れば、言語は之れを離れて獨立に存在して居る或實在を指示するもの、此實在の符號たるものとせられて居る。具象觀念論者が言語を單なる傳達器と見而して所謂具象觀念を以て之に依りて指示され傳達さるゝものと見做して居るのは、畢竟此の如き素朴的實在論の立場に止まるものに外ならない。若し吾々が多少でも嚴密に各の單語に就て之れに相當する實在なるものを検査し、之れに相當する具象觀念なるものゝ可能を検査するならば、言語は決してそれと離れて存在する或實在の模寫ではなくして、寧ろ言語に依りて或新らしき實在が創造せられるのであり、言語は寧ろ即ち實在であると云はなければならぬことが明瞭となるであらう。此事は諸種の關係や限定や理由やを云ひ現はす語、例へば『何々ならぬ』『何々せぬ』と云ふ如き否定の副詞、『何と何と』『而して』『ならば』『何々の故に』等の單語に於て尙一層明らかである。云ふ迄もなく是等の語には何等の具象觀念が伴はない、従つて所謂實在の何物をも是等の語は指示して居らないのである。

これは文章に就て見てもやはり同様である。今私は便宜の爲めスチーヴンソンの『カトリオナ』第二十二章の中、夏目漱石氏に依つて譯出された一節を擧げよう（夏目氏文學評論第六篇）。バルフォアは已に短艇に飛び移つて、カトリオナが危険を冒かして飛び下りるのを待つてゐる

『短艇へ下りて見ると、親船で考へたよりも、事が餘程六づかしい。船は見上げる程頭の上にある。あるかと思ふと急に揺り落ちて来る。錨纜で留められながら、横に傾いたり、どつと沈んだり、危い事夥しい。自分は詰らぬことをしたと考へ出した。カトリオナはとて下りられやしない。自分一人でヘルオエトの岸へ上げられる計りである。報酬と云つたらゼームス・モアに逢へる位のものである。然しこれは女の勇氣を勘定に入れない考であつた。女は自分が何の躊躇もなく、内實は兎に角飛び下りる様子を見てゐたのである。無論たつた一人で飛び下りた男に負ける丁見はなかつた。女は船側に立ち上がつて、桅綱に捕まつた。風が裳裾に吹き込んだので、下りるのが益危い。都では憚る程に靴下が見えた。一分の猶豫もなかつた。止めやうとしても止めることが出来ぬ位である。自分は此方の側に立つて兩手を擴げた。折から船は揺り落ちて来る。船頭は劔呑な所迄我とわが短艇をよびき寄

せる。カトリオナは其時空に飛んだ。自分は幸に下から女を受けた。傍にゐた漁夫が支へて呉れたので漸く踏み應へた。女は荒い息遣ひをして、しつかり自分に嚙り付いた。そこから兩手で嚙り付いた女諸共艦の方へ移された。親船では、船長も水夫も乗合も一齊に左様なら御機嫌ようと云ふ。短艇は岸の方に向き直つた。』

此叙述は夏目氏の評した如く實に『活きてゐる。鋭い神經が働いてゐる』。併し之れを讀む者に此場の光景が所謂具象觀念として現はれるとは云へない。之れを形容して、目之れを見耳之れを聞くが如しとは云へるであらうが、實際見らるゝ様な視覺像に似通つたものは事實吾々の心には浮ばないであらう。言語學者スタインタールは其『心理學及言語學概論』[*Einleitung in die Psychologie und Sprachwissenschaft*, 2. Aufl. 1887, S. 272] に於て、グーテの『キルヘルム・マイスター』の開卷の數行を引き、其叙述の優れてゐることを認めると共に、之れを讀む者の心には全く何等の具象的心像も浮び得ぬことを指摘して居るが、それと同じ様に上の文章の一字一句を追ふて、それに相當する具象觀念を探がし求めるならば、吾々も亦遂にそれが徒勞であり、不可能であることを發見しなければならぬであらう。ホーマーの英雄シキクスピアヤの人物も、それが詩及劇として讀まるゝ限り、やはり此約束を免かれることは出來ないの

である。――勿論かゝる叙述の中の或語若しくは或句に對して或讀者は或は可なり明瞭な視覺的乃至聽覺的心像を其極端の場合に就て云へば病的に想ひ浮べ得るかも知れぬ。又フタルケルトが好んで要求する沈潜的熟讀の状態に於ては、此の如き心像の現出は恐らくは一層の便宜を興へられ、そして此の状態の確かに感傷的なことを裏切るかも知れぬ。併し其等の現象は、畢竟讀者の性及び個性に依つて左右せらるゝ精神能力の個人的差異に隨つて變化するものであり、而して是等の能力の諸種の型例へば運動型視覺型の如きや、性的乃至個人的差異の條件等やは興味ある問題であるに拘はらず、叙述そのものゝ本質的條件に依つて定まるものではないことを注意すべきである。(11)

(11)ハイヤトは『詩學の原理』殊に其第三節に於て是等の點を詳細に論明して居る。今は唯其中重要なる個所と思はるゝ左の一節を擧げて置くに止める。

Es ist kein schlimmeres und verdichtes Märchen erfunden worden, als die Fabeln von der Phantasie, die selbständig den Inhalt der Vorstellungen zu Sinnbildern ausgestaltet: hätten wir diese Phantasie, sie würde die ganze Poesie zerstören. Die Poesie ist nur denkbar und nur möglich als Kunst der sprachlichen Vorstellung; als solche tritt sie neben die Künste der Gesichts- und der Gehörwahr-

nehmung. Sie ist keine Synthese der Künste des Geichts und des Gehörs im Reiche der Phantasie, sie ist keine Vereinigung von bildenden Künsten und Musik auf höherer Stufe. Die sinnliche Wirklichkeit kommt in ihr nicht so, wie sie wirklich ist, als sinnlichanschaulich, als bewegt und tönend zum Bewusstsein, sondern ganz so, wie sie sich in der Bearbeitung durch die Vorstellung annimmt, in aller Gedankenhaftigkeit und Geistigkeit der Vorstellung und der dadurch ermöglichten unanschaulichen Verkürzung, Zusammenfassung und Trimmerhaftigkeit. Und diese unanschaulich gewordene Andeutung der Wirklichkeit, diesen konzentrierten und ins Geistige umgesetzten und immer wieder vom rein Geistigen durchsetzten Auszug aus der Wirklichkeit recken und dehnen wir nicht in seiner wirkliche Gestalt aneinander, auch stellen wir seine durch die Sprache zerstörte Sinnlichkeit nicht wieder her, sondern in der Form, in der wir ihn bekommen, übermitteln er uns den Gehalt. (Meyer, Stilgesez der Poesie, S. 57)

尙附言して置きたいことは、文學に於ける具象觀念を否定する吾々の見地は決して文學に於ける所謂『繪畫的描寫』若しくは『言語的繪畫』Word-paintingを否定する見地と同じでないこと云ふ點である。言語が有する事物を『描寫』するの能力は、私の見る所に依れば、レンシングが、認容したよりも遙かに大なるものがあ

る。文學は唯繼起的なる觀念及動作のみを寫すことを本體とすると考へるのは、言語をあまりに器械的に見た結果である。ミューセルの云つた如く『言語は、詩人の指に依りて燐光を附けられる時に光る』。吾々の注意したいと思ふ點は『言語的繪畫』が『繪畫』の單なる(想像力の上に於ける)複寫ではあり得ぬと云ふ點に在る。

(二)此點に關しては、彫刻の觀照の際に於ける觀者の想像力に基く附加物に就て、*ハンミヤ* 自身注意して居ることが能く當て筈であると思ふ。

Der Zuschauer tut dies aber, obwohl auf Anlass, doch nicht unter Anleitung des Künstlers, es ist also zufällig, ob er dies Vorher und Nachher sich richtig oder falsch, schön oder unschön vergewärtigt und wie weiter es fortführt, ja was das letztere betrifft, so ist überhaupt gar nicht zu bestimmen, an welchem Punkte dieser Reihe seine Phantasie umbiegen und zu der unentwickelten Sammlung von Momenten in Einem entwickeln, die das Kunstwerk vor Augen stellt, zurückkehren soll. (Vischer, Aesthetik, III § 841. S. 1183)

六

之れを要するに、具象觀念説は、

(一) 一言語的敘述に具象觀念の伴ふこと、而してさう云ふ場合に言語的敘述が藝術的なること、若しくは具象性を有することを主張する。文學が藝術として具象性を有すること、若しくは有しなければならぬことは、吾々も亦承認しなければならぬ。美の具象性は吾々の見る所では、其の本質に外ならぬのである。然しながら具象觀念説の立場に於ては、美の具象性が基けられる所の具象觀念は、『內的直觀』に與へらるゝもの、『內的感覺』たる想像に與へらるゝものとせられ、文學は一種の『內的繪畫』と見做される。此意味に於ての具象觀念は、吾々は其れが可能であると云はるる點に於て、而して尙一層それが藝術の本質を形成すると云はるゝ點に於て、之れを否定しなければならぬ。文學は繪畫でないことを、レンソングが已に明らかにしたと同じ様に、吾々は又文學は『內的』繪畫ではないことを主張しなければならぬ。

—— 言語に具象觀念の伴はぬこと、又之れを喚び起すことが其役目ではないことは私の知れる限りでは、バトソグが已に最も早く之れを論明して居る。Ed. Tanker, A Philosophical Inquiry into the Origin of our Ideas of the Sublime and Beautiful, P. V. 詩人又は小説家が彼等の描寫する光景若しくは人物を、實際『目に見る』と云ふ事實、此の如き幻覺

Hallucinationの著しい例は Dickens やフロベールに認められるほ吾々の見地に對する反證とはならない。問題は言語的敘述が具象觀念を喚起する力を有するか否かに在つて其の敘述の背後に若しくは周圍に其れ等が附纏ふか否かではない。又文學に於ける敘述に著しい繪畫的描寫や形像的言ひ現はし *for bildliche Ausdruck* や有情化 *Personung* や人格化 *Personifikation* や直喩や隱喩等の事實も具象觀念説の論據として擧げることの出来ないのは云ふ迄もない。此事實は寧ろ反つて言語的敘述が感覺的具象的觀念と全く關係なしに成立することを示す十分なる證據となる。何故ならば形容的なる云ひ現はし(例へば『風が帆を接吻する』を具象的に表象することは滑稽に陥らなければならぬ)からである。感覺的具象的實在から全然分離したる抽象的世界である故に言語的敘述に於ては、風と接吻とが一つの形像的云ひ現はしに結び附けられ得るのである。

(二) 具象觀念説が『内的直觀』 *die innere Anschauung* と云ひ『内的感覺』 *der innere Sinn* と云ひ又『想像的假象』 *der Phantasieschein* と云ふ所の想像力及び想像的心像は、一見ペーターの所謂想像的理性と異なるものでない如くに考へられる。併し此二者の實は大に異なるものであること従つて想像力を承認することは決して具象觀念説

を承認することと同一でないことを注意しなければならぬ。具象觀念論の立場から云ふ想像力は、言語の示唆に基いて具象的心像を作り出す如き能力を指す。而して言語の示唆に基く心像である故に、感覺像の外的なるに對して、之れが『内的』と呼ばれる。具象的心像を作り出す能力を指して想像力と云ひ、之れを目して内的と云ふのは必しも非難すべきではないが、言語の示唆に基いて尙嚴密に云へば言語を機會として、之れを作り出す能力と見做す點に於て難點が存するのである。フイッシャーは文學を(音樂も亦或程度まで)『想像の藝術』であると云ひ、フオルケルトもさう云ふ、そしてハルトマンも亦總ての『感覺的假象の藝術』に對して文學を『想像的假象の藝術』であると云ふ。難點は、即ち、想像力若しくは想像的理性を總ての藝術の根本能力と見ずして、之れを他の總ての藝術に對する文學の特殊能力と見る所に存する。文學の特殊能力と見られた想像力は言語の示唆に基いて尙嚴密に云へば、言語を機會として、具象的心像を作り出す能力である。然るに言語の示唆と具象的心像との間に、若しくは言語的敘述と具象觀念との間に、何等の必然的關係も存しないことが明らかになつた以上、此の如き想像力は畢竟言語から獨立に自由に具象的心像を作り出す所の能力たるに外ならないことも亦明らかである。それが自由

であり獨立である點から云へば、此種の想像力を以て或高い能力であるかの如くに考へることも多少理由のないことではないが、併し其自由は即ち言語と關係なき自由であり、従つて文學と關係なき自由なのである。具象觀念論の立場から云ふ想像力は——『其所に於ては理念にして苟くも感覺的に現はれざる如き何物もなく、又覺的なるものにして理念の純粹表現たらざる如き何物もなく、』又『此複合的能力に取つては如何なる思想も如何なる感情も必ず其れの感覺的類似即ち象徴と双生的である』所の『想像的理性』ではない。換言すれば、其れは言語を『傳達器』と見做して、之れに對して『內的』なる所の具象觀念を作り出す能力である。さうであるからして、此の如き想像力は藝術の根本的能力でないと共に、又文學の特殊的能力でもないことが明らかであらう。

(三) 具象觀念説は、さうであるからして、畢竟『言語、傳達器』の見地を其根柢とするものと云へる。具象觀念説の總ての論議は此中心から發するのであり、而して又此中心に復へるのである。吾々も亦、或意味に於ては、言語が『傳達器』たることを許容し、言語を單なる符號の如くに取扱ふことを非難するものではない。併し其意味に於ては、當然又繪畫彫刻に於ける色彩や形、音樂に於ける音も亦傳達器たりと云ふ

べきであつて、獨り言語のみが符號と見做されるべき理由はない。形式と内容を
 理論上吾々が分解し得る限り一方を以て他方の符號若しくは容器若しくは傳達器
 と見做し得るとは云ふ迄もないことである。そして斯かる場合には、其内容は同一
 であるに拘はらず其形式の異なるに随つて諸種の藝術の種類が成立すると考へる
 ことも決して不當ではない。又同様に斯かる場合には、其形式は傳達器として其自
 身同じであるに拘はらず其内容の異なるに随つて諸種の藝術の種類が規定せられ
 ると考へることすらも決して不當ではないと云へる。併し其孰れの見方も斯かる
 場合正當であり得ると云ふ其同じ理由からして、唯ひとり文學に於ける形式(言語の
 みを以て傳達器と見做す見地だけは全然不當でなければならぬ。其れ故に具象
 觀念説の立場から主張せられる言語傳達器論は吾々の許容し得る意味に於ての其
 れてはあり得ぬ。さうならば、其れは如何なる意味に於て傳達器と見做して居るの
 であるか。言語が符號に過ぎぬ、其故に傳達器に過ぎぬとせられるものは、第一には、
 言語が自然的符號でないこと、第二には、其れが忠實なる描寫でないことに基いて居
 る。(第一の點は言語人爲説と關聯する言語發生論に、第二の點は認識論上の描寫説
 に脈絡を引いて居る。)而して是等の手近かなる『事實』から、言語は色彩や形や音

の如くに其儘或物を代理して居るのでなく、直接的感覺的要素のみで成り立つものでなく、其れ自らは何等の意味なき略符であると考へられる時、文學に於ける言語が傳達器に過ぎないと云ふ考、文學に於ける形式が否定されなければならぬと云ふ考、具象觀念が伴はれなければならぬと云ふ考が起る。具象觀念説の立場は、其故に一面に於ては、言語發生論の正しき考察と認識描寫説の誤謬の摘發とに依つて根本的に破壊せられ得ると共に、一面に於ては、一層手近かには、直接的感覺的要素と間接的聯想的要素との美的對象に於ける役目の正當なる理解に依つて——換言すれば、美の具象性は聯想的要素の排除を必要としないこととの理解に依つて——批評せられ得る。何故ならば、具象觀念説が言語を傳達器視して、文學に於ても正當には認容せられなければならぬ所の『理念』と『感覺』との融合を認め得ない所以は、『感覺』としての言語が『理念』と結び附き得ぬ程に形式的であると見做さるゝのに據るのであり、而して言語がそれ程に形式的であると見做さるゝのは、聯想的間接的要素を盡く言語其ものから排除してしまつたのに基くからである。言語は云ふ迄もなく其意味(即ち聯想的內容)なくして成立するものではない。併し此聯想的內容は、決して美の具象性と兩共しないものではなく、言語そのものをして美的形像なら

しめることを妨げるものでもない。具象觀念説は美の具象性が感覺要素の高調に在ること、形式に依りての内容の滅却に在ることを知つて、聯想的要素の包含が必しも之れに煩ひとならぬことを知らないのであると云へやう。

七

以上述べた所からして、具象觀念説が文學の藝術的本質を見定めて居らぬこと、従つて美の具象性を正當に説明したものと云へぬことは明らかであらう。文學の形式を單なる言語の音調に在りと見做して之れを否定し、文學の具象性を言語に依りて傳達さるゝ具象觀念に基けようとするのは、直接的感覺的要素を、間接的聯想的要素から分離して之れを形式と見做するのに據る。

美の具象性の條件として考へられる感覺的要素の高調若しくは形式の力説や、想像的理性やが斯かる意味に於けるものでないことも従つて明らかであらう。感覺的要素と形式との高調は、所謂直接的感覺的要素を形式と見做して聯想的内容を排除することではない。加之想像的理性の對象として美的藝術的對象を考へるとは、概念的なるもの思想や感情や總ての依他的意味を排除するともない。純粹知覺

の對象と云ふのも、先概念的 Vorhergehend と云ふ意味に於ては、必しも美の具象性を規定するものと云へない。美的藝術的對象が想像的理性の對象であり、其故に具象性であるとは云ふのは、其中に概念的なる抽象的なる總てのものを容れぬと云ふ意味に於てではなくして、總ての内容が形式に攝取せられること、ペーターの語を借りて云へば、『如何なる思想も如何なる感情も必ず其れの感覺的類似即ち象徴と双生的たることを意味する。美の具象性とは、總ての意味に於ての形式と内容との直接的融合に外ならない。従つて美の具象性を可能ならしめる所の想像的理性とは、概念的なる抽象的なる總てのものをさへ其れの『象徴と双生的』なる一面から見ると、その見方を可能ならしめる能力を指して云ふのである。純粹知覺の對象と云ふのも亦之れと同様に純粹知覺の見地の下に見らるゝこと、即ち其見方若しくは其能力を意味するのであつて、概念に依つて精製される爲めに與へられたる如き素材としての『所與』を指すのではない。而して美の具象性を成り立たしめる所の能力——云はゞ其れの三つの様式が感覺的要素の高調と想像的理性と、純粹知覺とである——は畢竟『直接的捕捉』若しくは コーン J. Collin の用語例で云ふ『直觀』であると云へやう。(完)